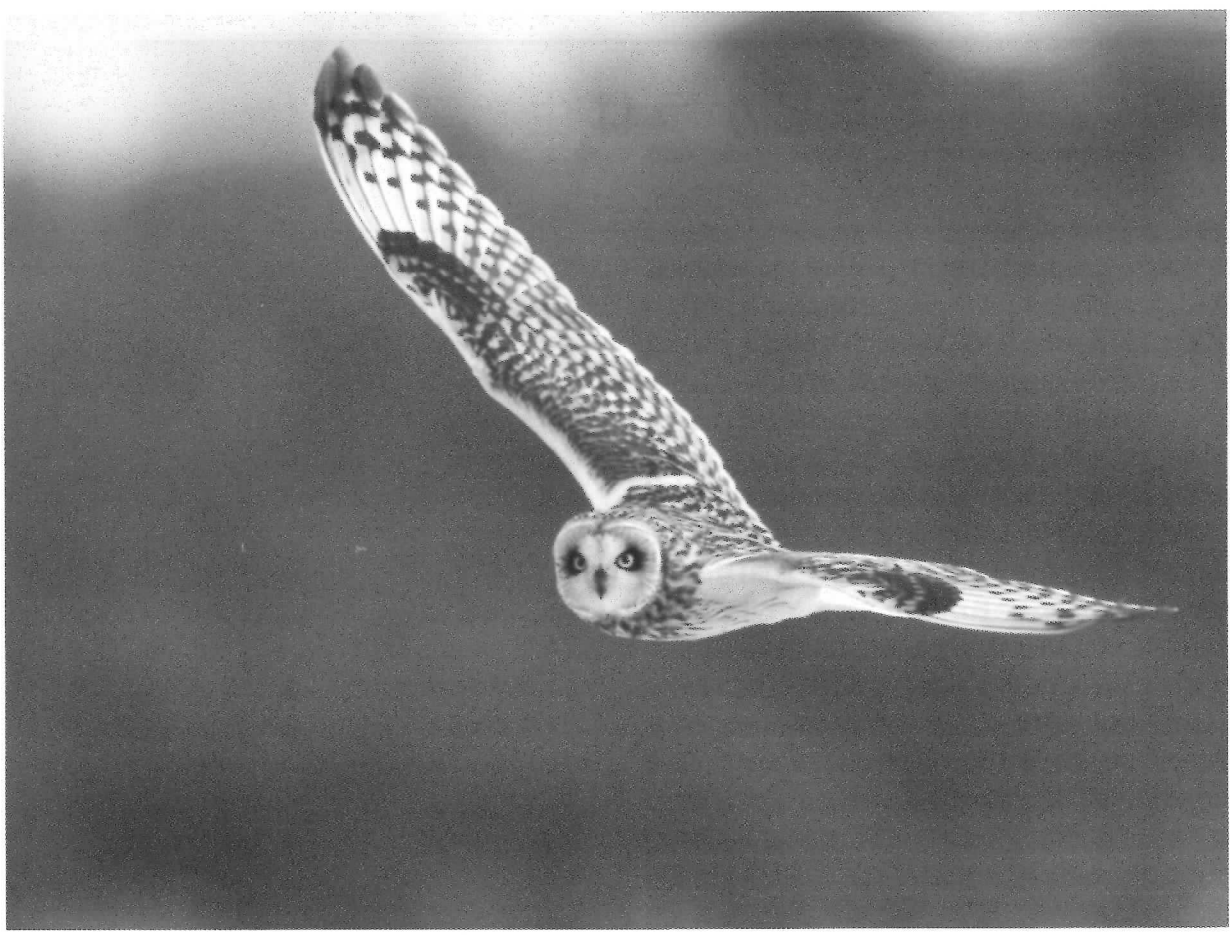
ISSN 0910-2396

野鳥だより

－北海道－

北海道野鳥だより第179号
編集・発行　北海道野鳥愛護会
発行年月日　平成27年3月21日

コミミズク



2015. 1. 15　勇払郡むかわ町
撮影者　佐藤　ひろみ（札幌市白石区）

もくじ

ミユビゲラは生きていた　上士幌町　川辺　百樹 …… 2
シルバ通信⑤　ヨタカがいる場所、いない場所　－北海道全土の個体数推定－
北海道大学農学部　森林生態系管理学研究室　河村　和洋 …… 4
北海道における野鳥観察を振り返って　－ヨーロッパトウネンの観察など－
江別市　田中　冬彦 …… 6
ヨーロッパトウネンをみつけましょう
札幌市北区　樋口　孝城 …… 8
表紙の鳥（コミミズク）　札幌市白石区　佐藤ひろみ …… 9
鳥の名前の話　－その１－
森林総合研究所北海道支所　川路　則友 …… 10
コウノトリの記録　―12月に苫小牧市（ウトナイ湖）、根室市―
広　報　部 …… 12
山田　良造さんを偲ぶ　北海道野鳥愛護会会長　小堀　煌治 …… 13
探鳥会ほうこく …… 14
鳥民だより …… 15
宿泊探鳥会のお知らせ …… 15
探鳥会あんない …… 16

ミユビゲラは生きていた

上士幌町　川　辺　百　樹

大雪山国立公園南部で18年ぶりにミユビゲラ（*Picoides tridactylus*）が確認されたとの記事が2010年７月29日付の毎日新聞に載りました。私は1988年にニペソツ山でミユビゲラに出会ってから音更川上流の森林を探し回っていたのですが、再会を果たせず、もはや絶滅したのではとの思いがときどき脳裏をよぎるようになっていました。大雪山国立公園南部でのミユビゲラ確認の報に驚くとともに彼らの生存に安堵しました。

ミユビゲラの生息について、わたしは本誌131号の「ミユビゲラの復活を願って」で次のように書きました。

「北海道には針葉樹の生育する森林が各地にある。しかしエゾマツが優占する針葉樹林は、限られている。北海道で一番大きなまとまりをもつエゾマツ林地帯は大雪山系にある。これが北海道では大雪山系でのみミユビゲラが確認された理由だと、私は考えている。しかし、大雪山系のなかでもなぜ十勝三股なのかについては、『大雪山系のエゾマツ林地帯のほぼ中央に位置しているからかなあ』とお茶をにごしている。今後、北海道の各地域の針葉樹林の性質の違いが解明されると、ミユビゲラと十勝三股の関係がうまく説明できるようになるかもしれない」

このように私は過去の観察例からミユビゲラの生息地として十勝三股に強いこだわりをもっていました。しかし、今回大雪山国立公園南部で確認されたことにより、私の十勝三股へのこだわりは転換を迫られることになりました。

大雪山国立公園南部での観察

大雪山国立公園南部でのミユビゲラの観察は、2013年の日本鳥学会誌に「北海道におけるミユビゲラの観察記録」と題して掲載されました。これによるとミユビゲラは「北海道大雪山系十勝岳（43°25′05″N，142°41′11″E）付近の東西４km，南北３kmの範囲内」の標高600～800m地点で2006年～2009年に毎年雄1個体、2010年に性不明１個体、2011年に雌雄各１個体が観察されたといいます。観察地の環境について、傾斜地は針広混交林で、平地はクマイザサが密生し、至る所で湧き水が湿地帯を形成していると書いています。また2012年の日本鳥学会大会ポスター発表要旨には「枯木や倒木が目立つ疎林である」とあります。大雪山国立公園において、このような無立木地あるいは疎林地は風倒の発生とその後の処理によって出現します。つまりミユビゲラは大雪山国立公園南部の風倒地帯に生息していたのです（写真１）。

写真１．大雪山国立公園南部の風害を受けた森林。
風倒をまぬがれたエゾトウヒとダケカンバ

ミユビゲラと針葉樹

ミユビゲラはユーラシア大陸の北方針葉樹林帯と山岳針葉樹林帯に生息しています。ヨーロッパなどの文献では、ミユビゲラの分布がトウヒ属の分布と結びついていることやミユビゲラが針葉樹のなかでも特にトウヒ属を好むことが指摘されています。そしてミユビゲラが山火事、伐採、風倒によって生じた枯損木の多い地域を好み、風倒地帯に局所的に集中するとの見解もあります。つまりトウヒ属の優占する森林で風害などにより枯損木が発生することがミユビゲラの生息に大きな意味をもつと考えていいでしょう。

なぜミユビゲラはトウヒ属を好むのでしょう。風害などで樹勢が衰えたトウヒ属の樹木には、ヤツバキクイムシなどの穿孔性甲虫が寄生します。トウヒ属の樹皮は鱗片状をしているので、ミユビゲラはこの樹皮をはがし樹皮の下に潜むヤツバキクイムシなどを採食することができるのです（写真２）。

写真2. エゾトウヒの樹皮を剥がし採食するミユビゲラ（1988年9月ニペソツ山）

北海道の主要な針葉樹であるエゾマツ、アカエゾマツ、トドマツについて簡単に説明しておきます。これらはマツ科の高木ですが、エゾマツとアカエゾマツがトウヒ属、トドマツがモミ属です。ですからエゾトウヒ、アカエゾトウヒ、トドモミとするのが望ましいのです。最も個体数の多いのがトドモミです。トドモミはトウヒ属と異なり分厚い樹皮をもつため、ミユビゲラがこの樹皮を剥して穿孔性甲虫を餌とするのは難しいのです。エゾトウヒは、種子が雪腐れ病に弱いことから、主に腐朽した倒木上で次世代を育てます。トドモミより長寿なのですが後継ぎをなかなか育てられないという弱点があります。アカエゾトウヒは少数派ですが蛇紋岩地帯や湿地など特殊な場所で優占するという特性をもっています。エゾトウヒもアカエゾトウヒも材質が良く大径木になるため、北海道では優先的に伐採されてきました。そのためミユビゲラにとって大切なトウヒ属は、いまでは少なくなってしまいました。なお材積１㎥の針葉樹の大きさは樹高21m、胸高直径35cmほどです。

十勝三股の大規模風倒とミユビゲラ

北海道で初めてミユビゲラが発見されたのは十勝三股でした。1942年のことです。発見した井上元則氏によると、1936年10月の台風で20万㎥の風倒木が発生した十勝三股を訪れ、虫害木調査中に偶然ミユビゲラを発見したといいます。つまりミユビゲラは大規模風倒発生から６年後に発見されたことになります。

1954年５月の暴風と同年９月の台風15号（洞爺丸台風）とによる大規模風倒が石狩川源流部をはじめ、北海道各地で発生しました。当時の上士幌営林署管内（十勝三股など音更川上流域を管轄）での被害材積は98.4万㎥に及んだといいます。この大規模風倒発生から２年後の1956年７月に十勝三股でミユビゲラの巣が発見されました。そして４年後の1960年にニペソツ山の森林帯で採集されています。

それから音更川源流部での本種の確認はしばらく途絶えていたのですが、1988年9月1日にニペソツ山登山道沿いの標高1200m付近で風害により樹勢の衰えたエゾトウヒ（胸高直径77cm）で確認されました。この観察の7年前（1981年）の台風15号により音更川上流域では大規模な風倒被害が発生し、上士幌営林署管内での被害材積は、15.9万㎥にのぼりました。このように1942年から1988年まで継続的にミユビゲラの生息が確認されてきた音更川源流部では1936年、1954年、1981年に大規模風倒が発生していました。

大雪山国立公園南部での大規模風倒

大雪山国立公園南部の幾寅営林署北落合経営区－現在の上川南部森林管理署落合担当区および奥落合担当区では、1954年5月の暴風と洞爺丸台風による被害材積が6,000㎥（被害面積676ha）にとどまり、大きな被害をまぬがれました。しかし1981年8月の台風15号で大規模な風倒が発生しました。旭川営林支局広報紙「あさひかわだより」726号（1981年9月16日発行）によると、被害材積は幾寅営林署の奥落合・北落合、北幾寅の各担当区での15万㎥以上におよぶと見積もられました。その風倒跡地の広がりは、いまもGoogle earthなどで読み取ることができます。「南富良野町史」を見る限り1953年以前にこのあたりで大規模風害をもたらしたと考えられる災害記録はありません。また落合担当区および奥落合担当区に隣接する東京大学北海道演習林においては1954年の洞爺丸台風で31万㎥、1981年の台風15号で81万㎥の風倒被害がでていますが、1953年以前の大規模風害の記録はありません（梶幹男「持続的木材生産と環境保全の調和を目指して－東京大学北海道演習林の半世紀余の歩み－」http://www.valuefrontier.co.jp/hokkaido1.pdf 2013年11月26日参照）。このように大雪山国立公園南部では1981年の台風15号によりかつてないほどの大規模風倒が発生したのです。

風倒木の残置

井上元則氏は、十勝三股の風倒木の残置について注目すべきことを書いています。

「昭和11年10月３日に北海道を襲った颱風（気圧726粍）のため、同国有林内處々に約75万石の大風倒を生じた。當時鐵道が糠平驛までしか通じていなかったので輸送の便が悪く、風倒木の伐採搬出が急速に行われず、２－３年間其儘放置されたのである。これがため、カミキリムシ及びキクイムシがこの風倒木を温床として、鬱閉の破れたところに徐々に増殖し、遂に昭和15－16年頃に至ってカミキリムシの大発生となり、数万石の枯損木を生じたのである。筆者はこれが防除法研究のため、該地に屢々出張する機会を得た際に、これら害虫の天敵としてエゾミユビゲラが盛んに活動しているのを発見したのである」[1)]

大雪山国立公園南部では1981年の大規模風倒発生から30年余りを経た現在もミユビゲラの生息が確認されているわけですが、1981年当時東京大学北海道演習林に勤務していた知人によると、この時発生した大量の風倒木は搬出が遅れたといいます。つまり1936年の十勝三股と似た状況が出現したようです。したがって風倒木の残置によりキクイムシやカミキリムシなどの繁殖に好適となりミユビゲラの生息に寄与した可能性があります。もちろん1981年以降に発生した小規模な風倒や枯損木も生息に寄与しているでしょう。

エゾミユビゲラの生息条件

大雪山国立公園南部はエゾトウヒがきわめて多いところです。今日北海道でこれほどエゾトウヒの優占する森林帯にはなかなかお目にかかれません。これはこの一帯に火砕流堆積物が厚く堆積していることと関係しているようです。火砕流堆積物の裸地には病原菌が少ないらしく、エゾトウヒの種子は腐朽した倒木がなくても地面で育つことができるのです（写真3）。

十勝三股は見事な盆地地形をしていますが、これは100万年程前の巨大噴火によってできたカルデラの名残です。このカルデラにできた湖は、その後ニペソツ山付近から噴出した火砕流堆積物に埋め尽くされ陸化しました。このような火砕流堆積物の上に成立した森林はエゾトウヒの多い森林であったと考えていいでしょう。

写真３．火砕流堆積物が露出した土場跡に育つエゾトウヒの若木

このように両者にはエゾトウヒが多い森林帯であるという共通性がありそうです。そして、そこで大量の風倒木が発生し、残置されたという共通点が浮かんできます。つまり、エゾトウヒの多い森林での大規模風倒の発生と風倒木の残置、これがミユビゲラの分布東端の島嶼個体群であるエゾミユビゲラ（*P. t. inouyei* Yamashina, 1943）の生息条件として重要であるというのが現時点での私の結論です。

1）井上元則，1946．エゾミユビゲラの食性と森林害虫との関係．生物，1: 169-172.

この他の文献を知りたい方は、北海道森林整備公社が発行している「森林保護」第336号の「エゾミユビゲラの生息と大規模風倒の発生」をご覧ください。

シルバ通信⑤

ヨタカがいる場所、いない場所

―北海道全土の個体数推定―

北海道大学農学部　森林生態系管理学研究室　河　村　和　洋

皆さんはヨタカにどんなイメージを持っていますか？小学校の教科書にも掲載された宮沢賢治の「よだかの星」では、ひどくみにくい容姿の鳥として描写されていますが、野鳥を愛する皆さんの中には、特徴的な姿態や、夕方になると聞こえてくる「キョッキョッキョッ･･･」という独特な声に、親しみを感じる方も多いかもしれません。ヨタカは古くから日本人にとって、夏の夜の原風景の一部だったのだと思います。

ヨタカは夜行性で、夜空を背景に蛾などの虫を見つけて捕食します。東南アジアで冬を過ごし、夏になると繁殖のため、九州から北海道まで広く渡来します。巣は作らず、地上に直接1～2個の卵を産みます。繁殖時のなわばりは森林内の開けた場所、例えば伐採地などに作ることが分かっています。ヨタカの生息には森林と開けた場所が両方とも必要なため、かつては里山などで普通に見られる身近な鳥でした。ところが、近年、ヨタカはあまり見られなく

なっています。環境省の鳥類繁殖分布調査によると、1997-2002年にヨタカの生息が確認された場所は1974-78年の約40%、繁殖が確認された場所は約５%と激減しています。こうした現状を受け、2012年に改訂された環境省第四次レッドリストでは準絶滅危惧に選定されています。

ヨタカはなぜ減少しているのでしょうか？減少の原因の１つとして、繁殖環境の悪化が考えられます。一口に、繁殖環境の悪化と言っても、色々なことが考えられます。森林内の開けた場所が減っているのでしょうか？それとも温暖化などの気候の変化が関係しているのでしょうか？

そこで私は、北海道でヨタカがどこに多いかを決める要因は何か調べました。まず、環境（森林率、気温、標高など）の異なる調査地点を、北海道全土に25地域、各地域に５個（計125個）選びました（図１）。2014年６月中旬～８月上旬の晴れまたは曇りで、風の弱い日の19：30～3：30に調査しました。調査は全て1人で行いましたが、調査期間はすっかりヨタカと同じ生活リズムになってしまいました。各調査地点において、携帯スピーカーでさえずりを再生し、調査地点を中心とする半径250m円内で鳴き返す個体を記録しました。ヨタカの場所は、日中に行った調査地の下見と、ヨタカの声から推定しました。鳴き返す個体はなわばりを形成したオスですが、中にはスピーカーに寄ってきた個体もいました（写真１）。ヨタカの繁殖の邪魔をしないよう、短時間の再生としました。ヨタカは、開けた場所と森林の境にある高木に止まり、鳴いていました。ヨタカの声は驚くほど大きく、一生懸命、自らの存在をアピールしていました。厚沢部や七飯などの道南地域では、沢山のヨタカを確認できました。一番多くのヨタカを確認できた調査地点では、一度の調査で3個体が鳴いていました。一方で、釧路などの道東地域ではほとんど確認できませんでした。また、苫小牧の人工林内の伐採地などにも生息していました。調査を終えた後は、環境からなわばりを形成するオスのヨタカの個体数を予測する統計モデルを作り、北海道全土に適用しました。

写真１．調査で確認できたヨタカの影

その結果、北海道の中央部、南部にヨタカが多く、東部には比較的少ないと予測されました（図２）。

北海道でヨタカが多いと予測されるのは、繁殖期（6～8月）の平均気温が高く、調査地点の周囲６kmの森林率が中程度の地域でした。森林率が中程度の地域は、森林とそれ以外の土地が半分ずつ含まれ、農林業によって形成されている場合が多かったです。こういった環境を持つ地域は平野と山地の間に多くありますが、標高はヨタカの個体数に影響しませんでした。また、全道でなわばりを作るオスの推定個体数は約8万羽となりました。

人為的な活動によって森林率が中程度の地域を維持していくことが、ヨタカの保全に貢献するだろうと考えています。森林や農地などの土地利用が生物の生息に影響することは多くの研究で示されていますが、土地利用が生物の広域分布に与える影響はまだまだ分かっていません。人と生物の共存を目指して、土地利用が生物の広域分布に与える影響に関する研究が今後も必要です。

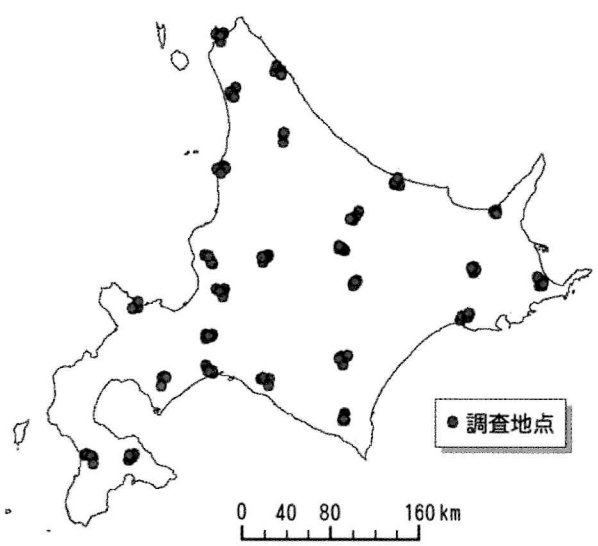


図１．調査地点の分布

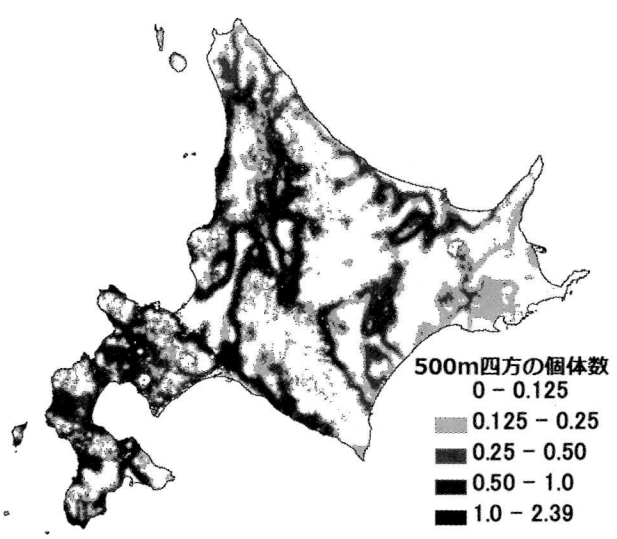


図２．北海道のヨタカの生息予測マップ

北海道における野鳥観察を振り返って
ーヨーロッパトウネンの観察などー

江別市　田　中　冬　彦

昨秋の週末の朝、いつものようにカメラバックを背負って石狩市のシギ・チドリ類の観察ポイントへ出向くと、2年ほど前に知り合って以来大変お世話になっているSさんご夫妻がすでに観察されていた。まずは鳥のチェックと双眼鏡をのぞいてみるが、鳥影は少ない。いろいろと情報交換しているうちに、なぜか野鳥だよりの原稿執筆依頼の話になってこのような機会を頂いた。

■野鳥への憧れと北海道へ

そもそも私が野鳥に興味を抱いて観察を始めたのは小学生の頃である。生まれ育った神戸の街の背後には六甲山があり、そこから流れ出す川があって海があってと、それらが私の格好の遊び場であった。休みとなれば遊び回って昆虫やカエルや魚を採ってきては飼育し、観察をしたり標本を作ったりしていた。

その中で唯一手に取ることのできない対象が野鳥であった。もちろん羽毛が綺麗で声が良く、しぐさが可愛いという思いもあるが、何よりも翼があって自由に飛び回れる、そのことに憧れを抱いたことが今でも鳥が好きで観察を続けている原点であったと考えている。

何とかしてその野鳥をじっくりと観察したいと考えて始めたのが、冬の庭先に餌台を作り家の窓からこっそりと眺めることであった。餌台にはヒヨドリ、メジロ、シジュウカラやウグイスなどがやってきた。それらを筆頭に校庭や公園、山で遊びながら鳥の観察をするようになり、図鑑を眺めては必死に名前を覚え、観察できない種はどんな姿なのだろうと想像しながら楽しんでいた。そんな幼少期を過ごしたが、徐々にフィールドへ出ることが少なくなり、鳥との距離は遠くなっていた。しかし、学生時代や社会人になっても、一度も鳥や自然のことが頭から離れることはなかった。

それから10年余りが経ち、思いがけず転勤で北海道へやってきた。母の故郷でもあるが、本州の人間からするとやはり自然豊かな広大な土地という印象があり、一度は住んでみたい憧れの土地だった。

転勤してきて間もない初めての春、何もいそうにないと思っていた雪の上に残るキツネやウサギの足跡。マイナス15℃の中、電柱からじっと雪の上を見つめるノスリ。まだ雪の残る畑道に一番にやってくるヒバリやノビタキ。まさかあの貴重なシギがこんな市街地の一画に生息しているのか？となかなか信じることができなかった奇妙な声の主、オオジシギ。道外では想像できなかった生き物たちがあまりにも身近で見せるその姿に驚き、観察できることに喜んだことは今でも鮮明に思い出される。

それからというもの、一体全体どれだけの鳥や生き物と出会えるのかという一念で、妻とともに双眼鏡とデジタルカメラ、レンズを担ぎ、全道をめぐる旅が始まった。いつ転勤するかわからないサラリーマンの身、週末しか観察できないという制限があるが、だからこその楽しみだと考え、時間のある限り外に出て観察する。雨の時は写真の現像や本を読んで頭の整理。「晴耕雨読」ならぬ「晴行雨読」だと読み換えて、それが私のスタイルになっている。出かけ過ぎだと妻には呆れられているが、一緒に観察すれば私よりも鋭い観察眼で鳥を発見し、助けてくれる心強い味方だと感謝している。

ハイイロチュウヒ　2015．1．4　むかわ町
この冬は雄も雌も観察することができた

■人との出会いと愛護会への入会

自分ひとりで各地を回り、観察するのには余りある北海道。やはりこんなにも身近で観察できるのかと驚いた一種、オオタカについて情報収集をしていた時、あるサイトに目がとまった。「野鳥お勉強会」との出会いである。さまざまな角度から鳥について居酒屋で語り合う会合？？にとまどいつつも参加し、有意義な勉強ができたし、さらにそこから人との繋がりが広がっていった。お勉強会主宰の富川氏から宮島沼（美唄市）の話を聞いてマガンの観察へ行き、そこでも多くの人との交流が生まれ、イベントへの参加などの活動へと続いている。Sご夫妻との最初の出会いもお勉強会か室蘭のポイントであったかと思う。その時々の観察ポイントへ足を運んでいると、何度か顔を合わせるようになって、一緒にスコープを覗かせてもらったり、情報交換をしたりするようになっていった。（私の場

合、情報を頂いてばかりで交換と言うのはおこがましいが…。）このような鳥の観察を通しての交流は非常に楽しいし、貴重なことだと感じている。

愛護会にはお勉強会への参加と同時に誘われ、すぐに入会したのでした。

■今回の一種「ヨーロッパトウネン」

冒頭のシギ・チドリ類の観察ポイントでのひとコマ。昨秋のシギ・チドリ類の渡りでは観察できる個体数が少なくさみしいと言われていた。ただし、である。種類は例年並みに豊富だったように思う。私にはこの年が初めての観察となるキリアイやツバメチドリもいた。例年観察されるチュウシャクシギやダイゼン、タカブシギ、オグロシギ、エリマキシギ、アオアシシギ、ツルシギ、オオソリハシシギ、ミユビシギ、ハマシギ、トウネンなどと出会っている。ちょっと仲間は外れるがマナヅルも観察されるなど、現地でみなさんから聞く情報などを合わせると原稿執筆時点（2014年10月）でも20種は下らない。前年のようにミヤコドリやヘラシギが来てくれたりしないかと期待していたがこれら２種は来てくれなかった。

そして、その中にトウネンとの微妙な差で、観察者を悩ませる代表格？とも言えるヨーロッパトウネンが含まれている。詳しい形態的分類点の説明は愛護会の樋口さんの記事にお任せするが、観察時のことを少々書かせて頂きます。いつものようにトウネンの小群を観察していると色鮮やかな個体が３～４羽観察された。トウネンの中にも夏羽が残っていたり、幼鳥で羽縁や軸斑が目立ったりして観える個体がいる。う～んちょっと違うなぁと思う。しかも観察された場所はあいにくのぬかるみで、本種の特徴である姿勢の判断はやや難しい。必死に図鑑で見た識別ポイントを思い出す。三列風切羽の羽縁に色が…ある！初列風切羽が尾羽を…超えるような？超えないような？

そんな思考をぐるぐると繰り返しながら、とりあえず証拠写真を撮っておいた。もう少し本腰を入れて撮れば良かったと後悔してもあとの祭り。翌週には観ることができなかった。ただし、その場で出会ったシギ・チドリ類に非常に詳しい方（同世代くらい？残念ながらお名前は聞くことができなかった）はヨーロッパトウネンですと断言していたし、後からSさんにもご指摘を頂き、よくよく撮った写真を確認するとヨーロッパトウネンで間違いないと確信した。

野鳥観察にはいろいろな楽しみ方があるが、このように観察しながら分類に迷ったり、心躍らせてポイントに出向いて目的の鳥に出会えなかったり、思わず出会えたりすることも醍醐味だと思う。今年の春か秋にまたヨーロッパトウネンがこの地に立ち寄ってくれることを期待している。次回はもっとじっくり観察しようと思う。

■四季それぞれの野鳥

話を北海道における野鳥観察のことに戻したい。雪国の生活に慣れ、本格的に野鳥を観察するようになって約3年。これまでに様々な方面へ出かけては観察を重ねている。その中で北海道の鳥類相の特徴と四季の移り変わりがだいぶ感覚としてつかめるようになってきた。雪国の生活と述べたが、その最たる特徴の雪だけでなく、北海道は四季がはっきりとしていると思う。立春を過ぎると雪は融け始め、立夏にようやく暑さを感じるようになり、立秋には一気に朝晩が涼しくなって、とほぼ暦どおりの移ろいである。それが本来かもしれないが、新鮮な感覚であった。季節の変わり目を知らせてくれるのは空気や植物だけでなく、（鳥を観察しているからというのが大きいとは思うが）鳥もしかりである。

夏には本州以南から繁殖のために渡ってくる鳥たちがにぎわいを見せる。森林にはキビタキやオオルリ、コルリ、コマドリが。離島ではウトウやケイマフリ、水辺でミサゴが観察できる。キジバトやモズ、アオサギもこちらでは夏鳥だ。少し遅れて草原や湿原の鳥たち。ノゴマやツメナガセキレイ、オオジュリンにチュウヒ。夜な夜な響き渡るエゾセンニュウの声も印象的だ。秋になると南下するシギ・チドリ類やマガン、タカの仲間の渡りがある。冬は厳しい寒さで観察できる鳥はいないのではないかと思っていた。しかし、数の多い少ないはあれレンジャク二種、ベニヒワ、コミミズクやハイイロチュウヒなど北海道以北から越冬のために渡ってくる鳥がいるし、海ガモ類の観察も面白

ヨーロッパトウネン　2014. 9. 13 石狩市
トウネンに比べやや脚が長くて姿勢が前傾

ノゴマ　2014. 7. 4　紋別市
ひなのために必死に餌を運んでいた

い。留鳥であるシマエナガやクマゲラ、オオアカゲラなど森林でも貴重な種類を観察しやすくなり、思いのほか豊富だ。いずれも厳重な寒さ対策が必要だが…そんな観察に遠征した時は、北海道のおいしい味覚を味わい、温泉へ浸かるのが恒例の楽しみ方だ。

クマゲラ　2014．1．11　江別市
冬のほうがその姿は観察しやすいが、やはり希

もっともっとたくさんの種類を挙げたいが、細かく挙げれば切りがない。本州では冬に観られる鳥が、北海道では夏に観られ、繁殖し、冬には姿を消す。留鳥だと覚えていた種がこちらでは夏鳥、漂鳥であるということにもだいぶ慣れてきた。北海道に暮らしてみてわかったことである。

当たり前に観られていた種が観られなくなったさびしさもあるが、これだけ環境が変われば当然のことであり、こんなにも豊かな鳥類を観察できることに喜びを感じながら、北海道での野鳥観察生活を満喫している。

今後も鳥の生態の観察を通して彼らが暮らす環境のことを考え、その貴重な環境を脅かさないように微力ながら行動したいと考えている。撮影した写真を紹介するブログ『野鳥と四季を追って』を開設したのでご覧いただけると幸いです。（http://birdsphotoshiki.blog.fc2.com/）

末筆ながら、今回このような機会を頂けたのも、野鳥観察を通じて人と出会い、つながりを持てたからであり、そのことに感謝し、御礼を申し上げます。ありがとうございます。

ヨーロッパトウネンをみつけましょう

札幌市北区　樋　口　孝　城

この記事を読む前に、まずは田中冬彦さんの記事、特にヨーロッパトウネンに関する部分をお読み下さい。「その場で出会ったシギ・チドリ類に非常に詳しい方はヨーロッパトウネンと断言した」と書かれています。そうなんです。そういう「非常に詳しい方」は決して少なくはありません。だいたいが若い人です。愛護会会員の大多数を占める私のような高齢者（まだ「後期高齢者」ではありません）にも、10代～30代の若い人にも、図鑑（いわゆる識別本）、インターネット、そして現場で鳥を見る機会などはおそらく均等に与えられているでしょうから、あとは興味の深さ、勉強の多さ、そしておそらく最大のポイントと思われる感覚（感性）と記憶力の差によるところが大きいのだろうと思っています。と、自分自身を慰めています。

ヨーロッパトウネンは希ではありますが、春には成鳥夏羽が、秋には成鳥冬羽および幼鳥（幼羽）が見られます。これまでに公表されている記録は北海道全体でも10例に満たないと思われますが、公表されていない個人記録や伝聞を含めると、決して「極めて」希ではなさそうです。見られる可能性が高いのは幼鳥です。トウネン幼鳥の群れに混じっていることが多いようですが、トウネンとの違いが微妙というのが悩ましいところです。

ここでは、愛護会の島田芳郎さんが撮影された写真をもとに、ヨーロッパトウネン幼鳥を見つける秘訣？を書いてみます。ただ、私自身は、たとえ目の前のトウネンの群れの中に居ても全然気付かずにいるかもしれませんから、あくまで「口だけ識別」、「後付け識別」のつもりで読んで下さい。シギ類はみんな似たように見えてさっぱり分からないという人は、まずはトウネン、ついでに、似たような大きさのヒバリシギを覚えて下さい。「わたしゃヨーロッパトウネンが１羽だけポツンといても分かるよ」というレベルの人はどうぞ読み飛ばして下さい。

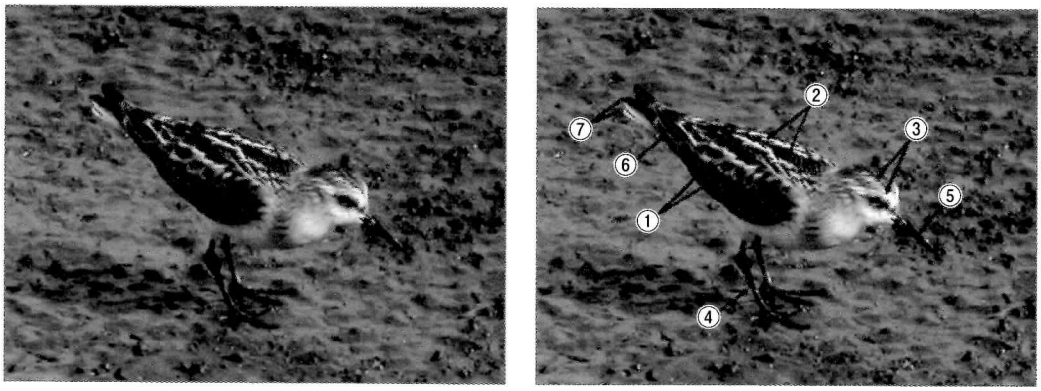
以下、写真に付けた番号に合わせて書きます。

①トウネンよりもちょっと色が濃く、めりはりがきいている感じです。これは背面の羽の軸斑（内側）は全体的に黒味が強いので、白や赤褐色の羽縁（羽の外縁）とのコントラストが強く、１枚１枚の羽がくっきりした感じに見えるためです。

②背中に明瞭なＶ字があります。でもあまりはっきりしない個体もいます。トウネンではだいたいは無いのですが、中にはうっすらとあるように見える個体がいます。困りますね。同じ時期のヒバリシギもＶ字がかなり明瞭です。でも、ヒバリシギの足の色は黄緑です。

③眉斑がトウネンよりもはっきりした感じがします。目の上で２つに分かれているように見えます。図鑑によっては全く触れられていないポイントですが、これは結構使えるだろうと私自身は思っています。頭頂側への枝分かれは分かりにくいかもしれませんが、本体はトウネンに較べて目の後方まで太く続いているのは確かなようです。

④餌を採っている時の姿勢がトウネンよりもちょっと前の



ヨーロッパトウネン（2014.9.14、いしかり調整池、島田芳郎さん撮影）の識別ポイント（本文参照）

めりの感じがします。ヨーロッパトウネンはトウネンに較べて足がちょっと長いせいです。でも、これはうまいことトウネンと同じ向きに並んで、同時に餌を採っていなければ分からないかもしれません。

ここまでは双眼鏡や望遠鏡で何とかなります。トウネンの群れの中にいた場合、チョコチョコと動き回るので、ちょっと目を放すと見失ってしまうかもしれません。一旦は見失っても、特に①と②の特徴をもとに目を付けたその個体を、すぐにまた、そして何度でも見つけることができれば、それはもうヨーロッパトウネンに間違いないといっても過言ではありません。もし「どれだったかなぁ。もう見つけられないや。」ということになれば、果たして本物であったか疑問符がつきます。

これは私の場合ですが、ヨーロッパトウネンであって欲しいという願望が募ると、トウネンの中での個体差程度の色の濃さも、背中のうっすらとしたV字も、頭の中ではっきりとしたヨーロッパトウネンの特徴に変換されてしまいます。願望と思い込みは禁物です。でも、もしかして？という気持ち(心構え？)は必要でしょうね。

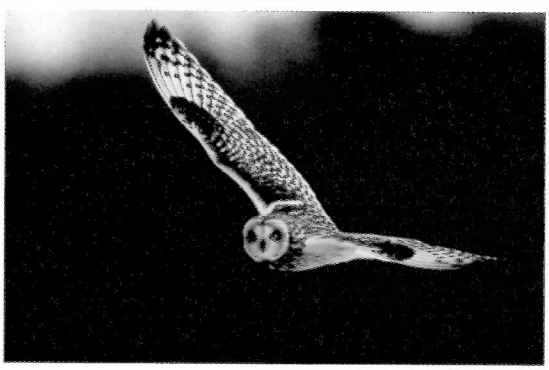
次の⑤～⑦の特徴の中には写真で確認しなければならないものが含まれそうです。幸いなことに今は廉価なコンパクトデジカメでもかなりのズーム機能があります。また、トウネンそしてその中に混じっているかもしれないヨーロッパトウネンは人間に対する警戒心が比較的低いので、じっと待っていれば目の前まで近づくこともあります。うまく写せたならば以下のところを見て見ましょう。

⑤嘴がトウネンよりもやや細く、やや長い。これは難しいですね。何しろ小さい鳥ですから、少なくとも私にとっては、「見て分かる」というものではありません。同じ角度から写したトウネンの嘴と並べてみて分かる程度かもしれません。

⑥雨覆と三列風切の羽縁が赤褐色を帯びている。でもこれは、どれが雨覆・三列風切なのか分からなければなりません。写真があると図鑑を見ながらじっくりと見ることができます。これは恐らく⑤の特徴よりも分かりやすいと思います。

⑦静止している時には初列風切（翼）の先端が、尾の先端よりも後ろに出ている。トウネンでは尾の先端が最も後ろです。この特徴は写真を見ても判断困難かと思います。少し似たヒメウズラシギですと翼先端が尾の先端を大きく越えているので分かりやすいのですが、ヨーロッパトウネンとトウネンとでは、余程にうまく撮れた写真でなければ比較困難が普通です。

「胴体が短く、足が長いため、体が横長で足が短いトウネンとは形態の違いが明瞭」と書かれている図鑑もあります（下線部筆者）。これはもう達人の域でして、とてもとても「明瞭」ではありません。これはちょっと置いておいて、ヨーロッパトウネンに気付くためには、普通に見られるトウネンをまずよく見ておくことが大事と思います。トウネンの羽衣には結構な個体差がありますから、気をつけなければなりません。よく見られる鳥を、よく見ておくことが、ヨーロッパトウネンに限らず、思いがけない鳥を見つけることにつながるのではないでしょうか。



表紙の鳥　コミミズク

（カラー写真はhttp://www.aigokai.orgに掲載）

鵡川河口は冬の撮影地として魅力的な場所です。海岸原野でコミミズクやツメナガホオジロなどに出会えるからです。この冬は7回行って、この時の10分程しかシャッターを切るチャンスがありませんでした。カラスに追われたり、夕方遅くなってから出たりしていたようです。

佐藤　ひろみ（札幌市白石区）

鳥の名前の話 ―その１―

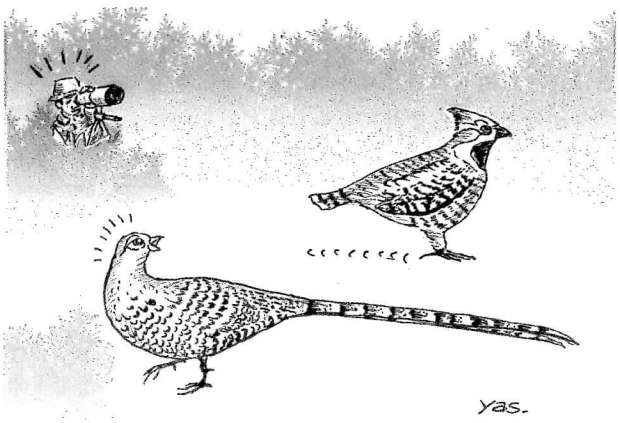
森林総合研究所北海道支所 川 路 則 友

鳥類に関するさまざまな知識という点では、現在は見やすい図鑑、わかりやすい解説書、インターネットによる情報提供などが巷にあふれ、必要なときに身近にいくらでもすぐに入手できる時代になっています。ただ、本誌の中でも日本の鳥のことを会員のためにわかりやすく解説するコーナーが必要なのでは？との声が広報幹事・本誌編集委員会の中から上がりましたので、まず手始めに私から、皆さんが知っていそうで知らないことも多いと思われる「鳥の名前のあれこれ」について書いてみました。じゅうぶんご存じの方も多いと思われますが、何かの参考になれば幸いです。

＜和名について＞

和名は地域によって違う？

鳥の名前に限らず、生物の名前にはいくつか種類があるのはご承知の通りです。皆さんが普段、探鳥会等で頻繁に使っている名前は日本語名、すなわち「和名」です。スズメ、カワラヒワ、キジバトなどなど･･･です。これは大変身近なもの、というより図鑑などで鳥の写真とともに載っているので、その鳥の名前としてしっかり確立されたものとお考えになると思います。もちろん、通常ウオッチャーどうし、お互いの間で使う分にはまったく問題ありません。ただ、ご自分の地元にとどまらず、あちこち探鳥旅行をされた方は経験があるかもしれませんが、その地域地域で同じ鳥に対して独特の名前で呼ぶことがあります。たとえば、皆さんよくご存じのメジロですが、南九州・鹿児島地方ではこの鳥を「ハナシ」と呼びます。また、私の亡き父は、ホオジロのことを「メジロ」と呼んでいまして、これはもう混乱しますよね。なぜメジロをハナシというかというと、メジロがよく花の蜜を吸うことから「花吸い（ハナスイ）」と名付け、それが転じて「ハナシ」となったそうです。鳥の和名の付け方には、外形や特徴的な鳴き声から付けられたものが多いのですが、このように習性から付けるのは珍しいと思われます。ここ北海道でも、エゾライチョウのことを「ヤマドリ」とよくいいます。ご存じのように、本州以南にはれっきとした「ヤマドリ」という和名をもつ鳥が存在します。しかも、それは「山の鳥」というようなあいまいな表現ではなく、西暦600年代の有名な歌人である柿本人麻呂（かきのもとのひとまろ）が「あしひきのやまどりの尾のしだり尾の長々し夜を一人かも寝む」と詠んだように、特徴的な長い尾をもつ具体的な鳥として、当時からその存在が身近なものであったと思われます。たしかにヤマドリは北海道には本来生息しませんので、エゾライチョウのようにほかの鳥のことをヤマドリと表現してもわかる人どうしであれば、まったく問題ないのです。ところが、本来生息していないはずのヤマドリを過去に数百羽、狩猟のために道内数カ所に放鳥したことがあって、その子孫が現在も限られた場所で細々と生き残っているようなのです。おそらくそれを野外ではじめて見た人はさぞ混乱したことと思います。これは正真正銘の「ヤマドリ」であって、北海道で言うところの「ヤマドリ＝エゾライチョウ」ではない、と見ていない人にいちいち説明しなくてはなりません。かなり昔の野鳥誌や地方の野鳥の会会報などでは、鳥の地方名（方言）について調べた報告がよく載っていました。しかし、その地域に長く住んでいないと、なぜそんな名前がついたのかわからないものばかりです。



えっ、君もヤマドリなの？

全国で通じる和名はどうやって決めた？

一言で和名といっても、地方名がいろいろあるので、何とか全国的に通じる名前を、ということで、標準語ならぬ「標準和名」が、いま一般に使われている「和名」として決められています。これはどうやって決めるかというと、日本でもっとも権威のあると言われる団体が決めてしまえば、それにみんなが従うのではないかということで、一応、鳥の研究者が多く集まる組織である「日本鳥学会」が発行する「日本産鳥類目録」というものに書かれた名前をおもに利用しているわけです。日本鳥学会は1912年（明治45年）に設立された歴史の古い学会で、確かに権威があるのでしょう。行政機関から報道関係まで、目録が改訂されるごとにその方針にことごとく従っています。鳥類目録の初版は学会が設立されて10年目の記念出版として1922年（大正11年）に出されました。その凡例を読むと、「和名は主として内田清之助氏著の日本鳥類図説初版で採用されたものを使ったが、不適当と思われるものについては変更

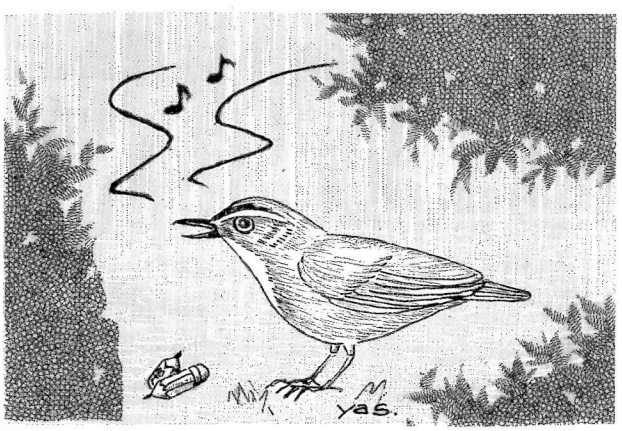
を加えた。また従来の和名がないものについては新たに命名した」とあります。ということは、それ以前の鳥の呼び名を採用したものが少なくないといえます。ここで興味深いことがあります。タカ類の一部は、昔はオスとメスとで名前が違っていました。ハイタカのオスを「コノリ」、メスを「ハイタカ」、ツミのオスを「エッサイ」、メスを「ツミ」といったそうです。鳥類目録初版では、ハイタカとツミに関しては、しっかりオスとメスの和名が異なるように書いてあります。これは改訂第２版（1932年発行）まで踏襲されましたが、改訂第３版（1942年発行）ではオスの和名は消滅し、ハイタカとツミだけになってしまっています。つまり、これらタカ類の標準和名はすべてメスの呼び方だけになったわけですが、これには、昔の鷹匠がタカを使う際には、小柄なオスより、大柄なメスを好んで用いたことを重視し、メスの名前を標準にしたという説があります。本当かどうか、私にはわかりません。もしその当時、探鳥会が行われたとしたら、「いま飛んだのはツミじゃない?」「そうだよね。エッサイより大きかったよね。」「いやどちらかというとコノリだと思うよ。」「確かに。ハイタカより少し小さかったものね。」といった会話が聞こえてきたんでしょうね。ちなみに日本での最初の探鳥会は1934年（昭和９年）に富士山須走でといいますから、微妙なところです。

和名はカタカナで

すでにここまで鳥の和名をいくつか挙げてきましたが、現在は名前をすべてカタカナ表記にしています。もちろん、漢字やひらがなで書くと「間違い」として怒られるわけではありませんが、とくに学術的な文章、論文などでは、和名はカタカナ表記と決められています。これは、日本語の文章自体が基本的に漢字・平仮名（ひらがな）交じり文であるために、たとえば学術論文の文章の中で生物の名前（カタカナ）を容易に識別できるためということです。逆に昔々のように、漢字・カタカナ交じり文が一般的な時代は、生物名を「ひらがな」で書いた方が読みやすかったようです。適切な例かどうかわかりませんが、大正７年に制定された「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」（通称鳥獣保護法）を挙げます。平成14年に「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律」に全面改正されるまで、法律文自体が漢字カタカナ表記で、とても読みづらいと思った方も多いことでしょう。それに引っ張られたためか、環境省で「狩猟鳥獣」や「渡り鳥条約」で指定される鳥獣の名前がこれまた「ひらがな」表記になっていて、カタカナ表記に慣れた身としては逆に非常に読みにくい思いをしました。ご承知のように、この法律は前記の改正で、やっと漢字・ひらがな表記の法律文になりました。

日本の鳥の名付け方と外国語名の考え方の違い？

このようにして、いまは便利な「標準和名」があるわけですが、これは日本語ですから、海外にいったら全く通じないのは当たり前な話です。海外にはそれぞれまた独自の名前があります。イギリスやアメリカなどでは、英名（英語名）、ロシアではロシア語名、韓国では韓国語名、中国では中国語名などなど・・・です。本誌第104号（平成８年６月）に「ヤブサメのあれこれ」と題して、拙稿を載せてもらいましたが、そのなかで「ヤブサメ」という名前の由来について、いろいろ考えたことを書いています。私がヤブサメの研究を始めたころ（1990年ころ）、図鑑（清棲幸保著の「日本鳥類大図鑑」や山階芳麿著の「日本の鳥類と其の生態」）には「藪鮫」と漢字で書いてありました。「藪（やぶ）」はもちろん生息場所のことを示すのはよくわかりますが、「鮫（さめ）」とはいったい何を指すのだろうか？　サメの色？　鮫肌？　ずいぶん悩みました。あるとき、調査地のササヤブの中で疲れてたたずんでいるときに、雨がシトシトと降ってきて、その音が何となくヤブサメのさえずりである「シーシーシーシー」にとても似ていることに気付きました。そこで、ヤブサメを最初に名付けた人は「藪鮫」ではなく「藪雨」と名付けたのではないか、と思いをめぐらせたのです。果たして、日本歳時記には「藪雨」というのが夏の季語として載っているのを発見しました。いまは、おそらく探鳥会などで皆さん、この鳥を「藪雨」ということで認識している方が多いと思いますが、私はそのとき、自分が日本人だ、ということを心から誇りに思いました。この鳥は、英名ではその当時「Short-tailed Bush Warbler（短い尾をもったウグイス）」と付けられていました。その後「Asian Stubtail」（ちびた鉛筆の先のような尾をもったアジアの鳥という意味？）という名前に替わっています。中国語名は「ウロコ模様の頭をもつ森のウグイス」という意味をもちます。それらに比べて、「藪雨」は実に風流な言葉と思いませんか？　もちろん、ヤブサメにも古名があります。ミソサザイに似た鳥でお腹が白い鳥を「塩（シオ）サザイ」として区別していたようです。これがヤブサメの古名と思われます。「サザイ」というのは古事記にも登場するほど古くから有名な「サザキ」という小さな鳥（ミソサザイの古名）という意味のようですが、江戸時代の有名な養禽書といわれる「飼籠鳥」（1821年ころ完成？）に「瀧（タキ）サザイ（別名



藪鮫？それとも藪雨？

イワサザイ）」という鳥が出てきます。この記述には、ミソサザイによく似ているが、背中がより黒っぽく、腹はウグイスのように白い、森の中で「チリチリチリ」と鳴いて、大木の下に巣を作る、常陸の国水府の北にある金砂山に棲んでいる、とあります。これを読む限り、ヤブサメであろうと推測できます。このように、すべてではありませんが、鳥の和名の付け方には歴史の重みを感じさせるものが多いように思えます。

外国産の鳥にすべて和名を付ける！！

ヤブサメの話で少し脇道にそれましたが、かように、鳥の日本語名（和名）は同じ種について、いくつもあることから、標準和名を使おうとみんなが決めないと混乱しかねません。これは外国産の鳥についても同じことが言えます。もちろん、外国に棲んでいる鳥には、その国の言葉があるはずです。しかし、それをすべてカタカナにして読んでは、非常に理解しがたい名前になります。バルドイーグル、ブルーティット、ホーツン、・・・。何のこっちゃ、という感じです。和名では、前からハクトウワシ（白頭鷲）、アオガラ（青雀）、ツメバケイ（爪羽鶏）です。ああなるほど、と思われる方も多いと思います。和名にすると、特徴をとらえた名前になっていることがよくわかります。ただ最近は、日本初記録という鳥が毎年数多く確認され、それらの和名で混乱することがしばしばです。ミカヅキシマアジ、クロアゴヒメアオバト、キジカッコウ、レンジャクノジコ、キヅタアメリカムシクイ・・・、どんな鳥なのか、私には想像もつきません。しかし、すでにしっかりした和名がついていますよね。では、海外にしか生息していない鳥について、これら以外でもすべて和名が付いているのでしょうか？

昔から飼い鳥として外国から輸入され、売買された鳥については、古くは江戸時代の諸藩の産物帳などに載っているほどで、よく知られた名前があります。たとえばキンケイ（金鶏）、ギンケイ（銀鶏）、ハッカン（白鸐）など羽色が美しいキジの仲間や、色彩が豊かで声も美しい小鳥のソウシチョウ（相思鳥）などは昔からよく飼われてきましたが、その名前は漢字名をそのまま和名にしたものです。ただ、たとえばソウシチョウの含まれるチメドリ（知目鳥）という鳥の仲間は非常に種類が多く、日本に持ち込まれる鳥はその中のほんの少しですので、そのほかの鳥については和名がついていませんでした。私がまだ学生のころに（40年ほど前ですが）、わが国鳥類学研究のメッカである山階鳥類研究所に当時勤めておられた松山資郎（まつやま・しろう）さんが、外国の鳥でまだ和名が付いていないものにすべて名前を付けようとされ、当時所長だった山階芳麿（やましな・よしまろ）氏とともに、「世界の鳥の和名」という小冊子を発行されました。これは各地域（ヨーロッパ、北アメリカ、南アメリカ、中央アメリカ、オーストラリア、中国、ロシア、東南アジア、南太平洋など）の鳥として、それぞれ分冊で発行され、学名、現地名と和名を併行して示されたものでした。この執筆に取りかかられたのが1970年ころでその後十数年間もかかって、ほぼ世界中の鳥に和名を付けられました。当時の私の指導教官が松山さんと親しかったこともあり、一介の大学院生に過ぎない私にも分冊の発行の都度お送りいただいたので、大変感動したのを覚えています。これらはのちにすべてをまとめて世界鳥類和名辞典として1986年に出版されました。いまにして思えば、世界中の鳥にすべて和名を付けることは大変な作業だったことと思います。いまのように手軽に海外の図鑑や文献がなかなか揃わない状況での当時の松山さんのご苦労には頭がさがります。ただ、和名については誰がどんな名前を付けようと別にとがめられるわけではないので、松山さんたちの提唱された名前とは異なるものが横行している例もあるようです。（つづく）

※ イラスト／本間　康裕

コウノトリの記録　―12月に苫小牧市（ウトナイ湖）、根室市―

広　報　部

2014年12月、コウノトリが苫小牧市内のウトナイ湖と根室市内の２カ所で観察されていることがブログと新聞にそれぞれ掲載されました。

ウトナイ湖の記録は、「千歳市在住の原口泰一さんが12月12日に目撃・撮影している。写真等は原口さんのブログ（http://yah55.exblog.jp/20611691/）に掲載されている」との情報が愛護会会員の島崎康広さんから広報部に寄せられたものです。

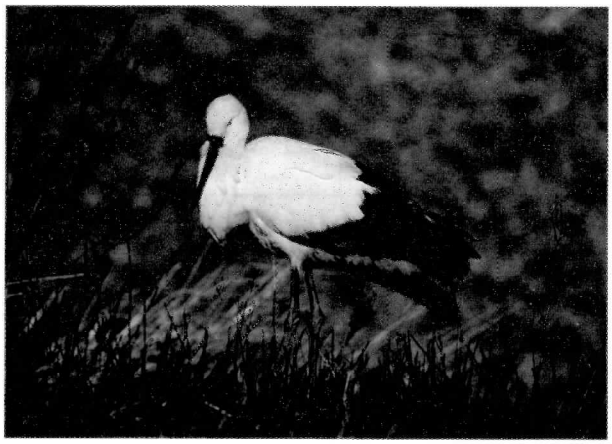
一方、根室市内で見られたコウノトリについては、12月25日付けの北海道新聞（釧路根室版朝刊）に写真付きで報道されました。観察したのは根室市の桐澤仁郎さんで、観察した時の様子をご本人に伺うことが出来ました。「コウノトリを最初に観察したのは12月21日午前10時40分頃で、根室市豊里のトーサムポロ沼から500～1,000m離れた道路沿いの小さな川にいた。脇道に車を止め、車内から撮影していたところ、鳥の方から近づいてきて、一番アップで撮ったときには20～30mの距離だった。水辺で何かをくわえるようなしぐさをしていたので魚などの餌を取っていたのかもしれない。10分から15分するとトーサムポロ沼の方へ飛んで行ってしまった。なお、春国岱ネーチャーセン

ターからは、前日の20日、根室市納沙布岬の駐車場でツルのような鳥が歩いているのを見て携帯電話で写真を撮った人がいる。これもコウノトリかもしれないという話があった」。ウトナイ湖と根室市内で観察された個体が同一かどうかは分かりませんが、北海道内を移動していた可能性はあります。

コウノトリは「日本鳥類目録第７版」によれば、アムール川流域、中国東北部、ウスリー地方、朝鮮半島と以前は日本の本州中西部で繁殖し、中国東部の南は福建省、まれに日本、台湾で越冬するとあります。

北海道での記録は、藤巻裕蔵氏（当会顧問）の「北海道鳥類目録改訂４版」によると1992年7月27日に空知管内月形町で保護された記録以降、十数例あります。その中でも12月の記録は初めてです。

コウノトリは2005年から兵庫県豊岡市で飼育個体を放鳥し、放鳥個体が長野、山梨、福井などで観察されています。今回、桐澤さんが撮影した写真を見ると、脚環がないことから野生個体と思われます。桐澤さんは今回の写真を送付した兵庫県立コウノトリの郷公園担当者から「野生個体ではないか」と説明されたと言います。



コウノトリ　2014. 12. 21　根室市　桐澤仁郎さん撮影

野鳥の渡来の理由を解明するのは困難ですが、根室市内は12月16～17日に例年にない爆弾低気圧に見舞われ、高潮被害などがでました。この気象がコウノトリの飛来と何らかの関連があるのではないかと桐澤さんは考えていることを付記しておきます。

山田良造さんを偲ぶ

北海道野鳥愛護会会長　小　堀　煌　治

昨年12月26日、元幹事の山田良造さんが亡くなりました。享年86歳でした。山田さんは会の創立時は旭川在住、その頃からの非常に古い会員でした。その後札幌に転居し探鳥会にはほぼ皆勤状態でした。野鳥を観察することはもちろん。写真撮影には特に情熱を燃やしていました。山田さんは秋田県の出身、東北訛りが残る親しみやすい話し方で周りの人に気軽に声をかけていました。温厚な山田さんも一たび写真撮影となれば目の色が変わります。立派な体格の小脇に500ミリのレンズ付きカメラ、三脚をかかえ、珍しい鳥であればまっしぐらに突進し、一心不乱、納得いくまで撮影に没頭していました。そんな姿が今でも目に浮かびます。山田さんの写真は旭川時代から関係者の間では有名でした。なかなか手に入らない写真が必要な時など、声をかければほとんど撮影済み、間髪を入れず提供してくれたものです。

撮影旅行には何度もご一緒しました。山田さんからお誘いを受けることも多く有ったのですが、こちらから声をかけると冠婚葬祭の時以外はノーと言われたことがありません。稚内にサカツラガン、ハクガンが同時に出た時など前日の夕方に急に声をかけたのですが、すぐに「いいですね、行きましょう」。山田さんの夢は北海道で記録された鳥を全部撮影することでした。その夢は半ばでしたが、撮影したのは外来種のコクチョウなどを含めフィルムカメラで281種、これを写真集「北海道の野鳥写真」にまとめ出版しました。これで安心した訳ではないでしょうが、腕を骨折した頃から少し元気が無くなりました。車も手放し、ご一緒しても、足元もおぼつかなく、カメラの操作も素早くできなくなりました。お誘いする事をためらっていた時、奥様から「老人ホームに入居した」との連絡を受けました。施設で穏やかに過ごされている事と思っていたのですが突然の訃報でした。

忘れてはならないのは「新年講演会」です。それまでは幹事が中心の集まりの悪い新年会でしたが、「新年講演会」にしてはどうか、と発案したのは山田さんです。多くの会員が集まる賑やかな新年会に変わりました。もう一つの功績は野鳥だよりに76号から連載した「北海道に舞い降りた迷鳥たち」です。文字通り迷鳥の記録ですが情報をキャッチすると素早く取材し、必ず写真を付け、観察記録も正確に記載しました。この記録はこれからも貴重な資料として受け継がれることでしょう。

ウトナイ湖

2014. 11. 9

白老町　鹿野内なおみ

苫小牧地方は一日中曇りの予報でしたが、晴れ男、晴れ女さんのおかげで風もなく穏やかな晴れの探鳥会となりました。鳥獣保護センター前で集合し、まずは道の駅裏手の湖畔で水鳥の観察から。もうピークは過ぎたものの、マガン、ヒシクイ、ハクチョウ、カモたちはとても多く、対岸の方はまっ黒に見えました。ただ常に逆光だったため識別は難しかったです。そんな中でもハクガンを確認した方々がいました。まだ黒い部分が残る幼鳥だったそうです。湖畔の木道を、和気あいあいと、野鳥のこと、草木のことなどをお話ししながら歩いて行き、途中のテラスに寄ってスコープを覗かせていただいたり、林側から聞こえるカラたちの声に双眼鏡を向けたり、ふだんは通り過ぎてしまいがちな実のついた樹木をじっくりと観察したりしました。私は北海道にいるのはハシブトガラだけだとばかり思っていましたが、「コガラもいますよ」と教えていただきました。ハシブトガラは角尾、コガラは円尾、これが識別のポイントの一つなのだそうです。

ネイチャーセンターに到着し、鳥合わせをすると、私が気付かなかった野鳥がいっぱい！32種もの名前が上がりました。

遠い探鳥地にはなかなか行くことができないのですが、また家族で参加させていただきたいと思います。ありがとうございました。

【記録された鳥】ヒシクイ、マガン、ハクガン、コハクチョウ、オオハクチョウ、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、オナガガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、ハジロカイツブリ、アオサギ、ダイサギ、オオバン、セグロカモメ、オオセグロカモメ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、オオアカゲラ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、コガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ゴジュウカラ、カワラヒワ、ドバト　以上32種

【参加者】青山明彦・みどり、安達裕子、阿部真美、今村三枝子、大表順子、鹿野内和弘・なおみ・裕子、北山政人、小堀煌治、齋藤由美子・佑朱、坂井伍一、佐々木譲、品川睦生、清水朋子、田中　陽・雅子、戸津高保・以知子、中正憲佶・弘子、蓮井　肇・茜、畑　正輔、樋口孝城、横山加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎、鷲田善幸　以上31名

【担当幹事】北山政人、鷲田善幸

野幌森林公園

2014. 12. 7

【記録された鳥】オオタカ、フクロウ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ゴジュウカラ、キバシリ、ツグミ、アトリ、マヒワ、ウソ、ミヤマホオジロ　以上18種

【参加者】秋山洋子、今村三枝子、臼田　正、笠井好美、川村宣子、栗林宏三、桑田義英、小堀煌治、齋藤由美子・佑朱、坂井伍一、品川睦生、瀬川　睦、高橋貞夫、辻田捷紀、戸津高保、野田貴代子、畑　正輔、早坂泰夫、広木朋子、藤田　潔、松原寛直・敏子、三井　茂、横山加奈子、吉田慶子　以上26名

【担当幹事】早坂泰夫、横山加奈子

小　樽　港

2015. 1. 18

札幌市　今堀魁人、鹿川美咲、内村かなた

今回の探鳥会にはたまたま知り合った方からのお誘いで今堀と内村は初めて、鹿川は３回目の参加をさせていただきました。天気はあいにくの模様で前日からの大雪で電車は朝から運転見合わせ、参加できないのではなかろうか…とも思っていましたが、愛護会の方々のご厚意で出発を30分ほど遅らせていただけた為、３人とも無事参加することができました。本当に感謝です。

バスの中でも鳥の話題で話に華が咲き、また初参加の私共にも皆様が優しく接していただいたお陰で道中も楽しく移動できました。

鳥を見始めていても最初の方は天候が回復せず強風と雪がちらつく中、日和山灯台や祝津漁港での観察となりましたが鳥はよく見られ、アビ類3種やハシブトウミガラス、アカエリカイツブリの冬羽、珍しい鳥ではニシセグロカモメ（ホイグリンカモメ）の第一回冬羽などこの時期ならではの鳥に出会えました。

他の観察地点では天候も徐々に回復し観察するには絶好の天気となりました。港内にはカンムリカイツブリの成鳥冬羽がとても多く、今年は当たり年なのかな？と思いながら観察していると目の前を一瞬イソヒヨドリのメスが通過したり、海ガモの群れの中にホシハジロが混ざっていたりとこの時期に少数越冬する鳥たちも見られ、さらには日本海側ではあまり見られないコオリガモのオスやコクガンなどバーダーからは人気の冬鳥もしっかりと観察できました。

最後の観察地点である港町埠頭では私共３人が出発に少し遅れ、ご迷惑をかけてしまったことは反省しています。申し訳ございませんでした。

最後となりますが、あいにくの天気ながらも最終的に40種を超える鳥に出会うことができ、楽しいひと時となりました。担当幹事の畑様をはじめ愛護会の皆様には本当に感謝の言葉しかありません、ありがとうございました。

【記録された鳥】コクガン、マガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、シノリガモ、ビロードキンクロ、ホオジロガモ、コオリガモ、ウミアイサ、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリ、アビ、オオハム、シロエリオオハム、ヒメウ、ウミウ、ユリカモメ、ウミネコ、カモメ、ワシカモメ、シロカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ニシセグロカモメ（ホイグリンカモメ）、ハイイロウミツバメ、ハシブトウミガラス、ウミガラス、ケイマフリ、ウミスズメ、コウミスズメ、トビ、オジロワシ、オオワシ、ハヤブサ、ハシ

ボソガラス、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ツグミ、イソヒヨドリ、スズメ、ハクセキレイ、ハギマシコ、ドバト
以上46種

【参加者】今堀魁人、臼田　正、内村かなた、内山純一、岡部良雄・三冬、鹿川美咲、河野美智子、坂井伍一・俊子、品川睦生、島田芳郎・陽子、清水朋子、高口麻美、高橋貞夫・芳子、田村裕子、戸津高保、中正憲佶・弘子、中田勝義、畑　正輔、早坂泰夫、原　美保、本間康裕、松原寛直・敏子、村田睦子、山室ゆかり、山本昌子、横山加奈子、渡会やよひ　以上33名

【担当幹事】坂井伍一、島田芳郎、畑　正輔

野幌森林公園
2015. 2. 1

【記録された鳥】トビ、オジロワシ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、ゴジュウカラ、ミソサザイ、ツグミ、アトリ、ウソ、シメ　以上21種

【参加者】秋山洋子、内山恭子、大表順子、太田敏枝、笠井好美、川村宣子、グローズ千鶴子、小西芙美枝、齋藤由美子・佑朱、坂井伍一、清水朋子、高橋貞夫、辻田捷紀、中正憲佶・弘子、野田貴代子、畑　正輔、早坂泰夫、藤田潔、辺見敦子、松原寛直・敏子、山本育子、横山加奈子
以上25名

【担当幹事】早坂泰夫、松原寛直

鳥民だより

◆ 野鳥写真展と写真募集のお知らせ

会　場：札幌エルプラザ　4階多目的スペース
（札幌市北区北8条西3丁目）
JR札幌駅地下直結または北口出口の北向い

期　間：平成27年５月12日(火)～５月25日(月)
９:00～22:00
（ただし初日は11:00から、最終日は16:00まで）

応募要領：写真は最近３年以内に北海道内で撮影したもので、サイズは四つ切、デジタル写真はＡ４サイズ。鳥の名前・撮影者・撮影年月・撮影場所を必ず添付してください。（原則としてお一人２枚以内とします。３枚以上の場合は展示優先順位を明記してください。）

応募締切：５月１日(金)までに、愛護会事務所（北海道自然保護協会内）に送付あるいは直接届けてください。
（札幌市中央区北3条西11丁目　加森ビル５　６階
自然保護協会 気付 北海道野鳥愛護会 宛て）

準備・展示作業：
・５月７日(木) 14:00～　事務所にて額付・加工・キャプション作成の準備作業を行います。
・５月12日(火) 10:00～　会場にて展示作業を行います。
両日とも、お手すきの方はご協力をお願いします。

※なお、引き続き野幌自然ふれあい交流館で６月に１ヶ月間の展示を計画しております。

【お問い合わせ】　小堀　煌治（011－591－2836）
畑　　正輔（011－894－0017）

◆総会のご案内

日　時：平成27年４月13日(月)　18:30～
場　所：かでる２・７　110会議室（１階）
総会終了後に懇親会を予定しています。

【新しく会員になられた方々】

田村　修一・裕子（札幌市西区）
今堀　魁人（札幌市南区）
鹿川　美咲（江別市）
山本　育子（江別市）
水島　　攻（札幌市東区）
新田　啓子（札幌市南区）

―宿泊探鳥会のお知らせ―
６月のサロベツ原野

今年の宿泊探鳥会はサロベツ原野で実施します。環境省の鳥類レッドリストで絶滅危惧種に指定されているシマアオジやツメナガセキレイなどの草原の鳥、アカエリカイツブリなどの水鳥を探します。

月　　日　平成27年６月13日(土)～14日(日)
集合場所　札幌駅　北口「鐘の広場」
集合時刻　13日(土)　7:15
行 程 等
１日目(13日)：札幌→サロベツ湿原（幌延ビジターセンター周辺及びサロベツ湿原センター周辺で探鳥）
２日目(14日)：（豊富温泉周辺で早朝探鳥）→サロベツ湿原センター周辺で探鳥→兜沼公園探鳥→天塩鏡沼公園探鳥→札幌
札幌帰着　14日19:00頃の予定（道路状況等によります。）
定　　員　45名
参加費用　20,000円（バス代、宿泊代、食事は13日昼食から14日昼食まで）
宿　　泊　豊富温泉ニュー温泉閣ホテル
（電話　0162－82－1243）
申込み先　佐々木　裕　宿泊探鳥会担当幹事
電話　011－596－2660
※４月１日(水) ９:00から電話で受け付け、定員になり次第締め切ります。
※午前中は電話が混み合い、お待ちいただくことがあります。話し中でも、ツーツーツーというお話中音は発せられませんが受付いたしておりますので、おかけ直しください。
旅行代金　申込み終了後から４月15日(水)までに下記口座にお振込みください。
北洋銀行　札幌駅南口支店
口座名　（株）エイチ・ビー・シー・ビジョン
口座番号（普通預金）3790202

- ☀ 探鳥会は悪天候でない限り開催します。
  （変更・中止する場合もありますので、愛護会のホームページでお確かめください。）
- ♣ 双眼鏡などの観察用具、昼食、筆記用具、図鑑などを持参して下さい。
  （探鳥地や当日の天候に応じて、防寒衣、雨具、長靴などをご用意ください。）
- ☂ 集合場所等については、愛護会ホームページ「探鳥地紹介」でお確かめください。
- ♣ 交通機関の運行時刻等については、バス会社等にお問い合わせください。
- ☀ **探鳥会の問い合わせ**
  北海道自然保護協会　☎011－251－5465　10:00～16:00（土・日曜、祝祭日を除く。）

開催日	探鳥地	集合場所及び集合時刻
4月19日(日)	モエレ沼	ガラスのピラミッド前　9:30
	中央バス：地下鉄東豊線環状通東駅発（北札苗線東69番・東79番）「モエレ公園東口」下車、徒歩15分。 開氷後の沼に浮かぶカモ類やオオバンなどの水鳥群、沼畔湿地草原や公園林の小鳥類を楽しみます。	
4月26日(日)	宮島沼	湖畔　10:00
	中央バス：岩見沢ターミナル発（月形行）又は月形駅発（岩見沢行）「大富農協前」下車、徒歩10分。 北への渡り途中のマガンたちが集結します。湖面で羽を休め、えさ場を行き来する姿は壮観です。暖かい服装で。	
4月29日(祝)	野幌森林公園	大沢口　9:00
	夕鉄バス：新札幌駅発(文京台南町行)「大沢公園入口」下車､又はJRバス：新札幌駅発(文京台循環線)「文京台南町」下車､徒歩各5分。 夏鳥たちが渡ってくる時期です。木々の芽が開き始めた森の中を、鳥たちのさえずりを聞きながら歩きます。	
5月5日(祝)	藤の沢	白鳥園（エルクの森パークゴルフ場向い）9:00
	定鉄バス：札幌駅発又は地下鉄真駒内駅発（定山渓温泉行又は豊滝行）「藤野3条2丁目」下車、徒歩10分。 藤野マナスル（岡田の山：316m）をウグイスやオオルリなどの声を聞きながらゆっくりと巡ります。	
5月10日(日)	野幌森林公園	大沢口　9:00
	4月29日の案内を参照してください。 木の間に見え隠れするキビタキ、梢でさえずるオオルリなど魅力いっぱいです。	
5月17日(日)	千歳川	さけますふ化場手前の橋付近の広場　8:00
	交通機関はありません。 千歳川沿いに発電所ダムまで行きます。たくさんの夏鳥が見られます。ヤマセミもたぶん楽しめます。	
5月24日(日)	鵡川河口	むかわ温泉四季の館駐車場　9:45
	道南バス：札幌駅前又は大谷地バスターミナル発（浦河行/ペガサス号）「四季の館前」下車。 鵡川河口と人工干潟のシギ・チドリ類がメインです。時にはチュウヒやハヤブサも現れます。	
5月30日(土)	野幌森林公園	大沢口　19:00
	4月29日の案内を参照してください。 夜の探鳥会です。どんな鳥の声が聞けるか楽しみです。懐中電灯や防虫剤の用意を。	
5月31日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線植苗駅前　9:10
	JR千歳線「植苗」下車。 鳥の囀りを聞きながら植苗駅からウトナイ湖へ向かいます。道沿いの森や湖畔草原の鳥たちを楽しみます。	
6月7日(日)	厚別川	川下公園駐車場　9:00
	中央バス：地下鉄東西線白石駅発（川下線白24番）「川下公園」下車。 厚別川の堤防を歩きます。草原の鳥が勢揃いし、林の鳥たちも楽しめます。	
6月13日～14日	サロベツ原野	
	詳細は今号－宿泊探鳥会のお知らせ－を参照してください。	
6月21日(日)	野幌森林公園	大沢口　9:00
	4月29日の案内を参照してください。 鳥たちにとって一番忙しい子育ての季節です。初夏の花も咲きそろい、鳥と野の花の両方を楽しめます。	
6月28日(日)	福移	福移小中学校前　9:00
	中央バス：地下鉄環状通東駅発（北札苗線）「福移小学校通」下車、徒歩5分。 石狩川堤防内外の草原や、石狩川・豊平川合流点の鳥を楽しみます。カワセミも期待されます。	

〔北海道野鳥愛護会〕　年会費　個人 2,000 円､家族 3,000 円(会計年度４月より)　郵便振替　02710－5－18287
〒060－0003　札幌市中央区北３条西11丁目加森ビル５・六階　北海道自然保護協会気付　☎(011) 251－5465
HPのアドレス　http://www.aigokai.org